

社会における諸課題に対する人文学・ 社会科学の応答について

2018年11月14日

盛山和夫

日本学術振興会学術システム研究センター

文系学問の危機

- 2015年6月 文科省通達
 - 国立大学の文系部局への縮小ないし編成替え圧力と受けとられる
 - 欧米でも、人文社会系への研究資金の減少傾向
- 文系学問の側から
 - まず、学術会議幹事会声明 2015年7月
 - 学問は何か目に見える形で<役に立っている>かではなく、<真理の探究>にこそ意義がある。
 - 人文社会系の学問には大きな社会的意義があるにもかかわらず、世間が理解していない。
 - 総合的な知の必要性
 - 現在の人間と社会のありかたを批判的に考察
 - 教育における人文・社会科学の役割：文化的多様性を尊重する人材
 - 2015年10月 学術会議幹事会声明

学会提言 学術の総合的發展をめざして--

人文・社会科学からの提言 (2017年6月)

- 人文・社会科学には、時間と空間の視座を組み合わせ、多様なアプローチを駆使して諸価値を批判的に検証するという特質がある。
- 伝統的に人文・社会科学は、自然科学の発展に「人間性」や「社会システム」の視点からの問い直しを迫ってきたが、今後この役目はますます重要になっていくと考えられる。・・・人文・社会科学には、課題の問い直しや持続可能な体制づくりをはじめとして、多くの責任が課され、期待が託されている
- 「人間の尊厳」や「平和」といった「人類共通の価値」を不断に鍛え上げること
- 論理的・批判的思考力・表現力などの「市民」として求められる基礎的能力（「市民性の涵養」）
 - 市民として求められる基礎的能力。研究における人文・社会科学の特性。

研究者からも

- 吉見俊哉氏『「文系学部廃止」の衝撃』集英社新書
 - 普遍的な価値の探求
 - 理系と文系の役に立つは違う
 - 価値とは何かという問い、19世紀後半以降に台頭
- 佐和隆光氏『経済学のすすめ—人文知と批判精神の復権』岩波新書
 - 真の学力：読解知
 - 人文社会知、モラルサイエンスとしての経済学
- **まとめと考察**：以上の議論や主張のポイントは、人文社会科学は十分に意義ある学問活動を展開している。それが理解されていないのは残念だ、ということ。

- 以上の、学術会議の提言や吉見氏、佐和氏の主張は基本的に正しい。
- しかし、・・・
- 今日の人文科学・社会科学は、価値創造、モラルサイエンスという課題にはたして取り組んでいるか？
 - 新しい「知」を創造しているか？ 学問上の「発展」はあるか？ それは学術コミュニティにおいて共通に探求課題として理解されているか？
- 人文科学・社会科学への期待、要請
- 「人文科学・社会科学がより一層その成熟度を高め、**人類の福祉の改善に貢献**していくことが期待される。」『学術研究の総合的な推進方策について』平成27年（学術審議会学術分科会）
- 「倫理的・法制度的・社会的課題について人文社会科学及び自然科学の**様々な分野が参画する研究を進め**・・・」（『第5期科学技術基本計画』p.47）

文系学問と社会への応答性

- しばしば、「人文学・社会科学は本来的に「役に立たない」とか、「役に立たなくていい」という見方が示される。これは正しいか？
- 人文学は*humanitas*から来ているが、これはもともと「公的な奉仕を積極的に行うような生き方になつた徳目をそなえた教養のある良き市民になるための学問」を意味している。
- また、中世の3大学問である法学、神学、医学はいずれも実践的な学問
- 現代の社会科学も、基本的に実践的
 - 経済学が代表的。社会学はもともと「社会の再組織化」（コント）の学
- **文系学問が社会への応答性を考えることは、むしろ当然。**
- 自然科学系学問と文系学問とで、社会への応答性になにか違いはあるか？
- また、人文学・社会科学の固有性とはなにか？
- それらについて考える前に・・・

今日の文系学問の内在的な危機

- いまどき、誰がデカルトやカントを読むか？ なぜ読まれなくなったのか？
- 学生が本を読まない。教養の解体。
- **本が読まれ**ないということは、これまでの学問的蓄積が継承されないということ。古典の意義の消失。

- かつてのマルクスやウェーバー、あるいは1970年代でもフーコーやハーバーマスなど、わくわくして読まれた思想があったが、今は・・・

- 哲学は、もはや「学問の王」としての地位をもたず、単に微細な「学説研究」や「分析哲学」に沈潜しているように見える。
- 文学も、そもそも読まれなくなってきた。

- 今日、自然科学者からも「生殖技術やAI技術の社会的問題については、人文知の智慧を」といった声があるが、応えられる研究はあるか？

人文学・社会科学の危機の背景

- 1968年以前（前期近代）

 - 大きな物語

 - (1) 「近代」という問い、歴史の意味（キリスト教を背景に）
ヘーゲル、マルクス、近代化論
 - (2) 並行して、「近代的人間像」「近代を生きるとは」など
（小説のテーマ）
 - (3) 「いかにして近代社会を構築するか」という問い
ホッブズ以来の社会理論
 - (4) 知の真理性に関する科学主義
論理実証主義、分析哲学

- 1968年以降、ポストモダン

 - 大きな物語の消失

 - 近代が「謎」ではなくなった
 - 近代否定の極致としての「反科学論」（一時の徒花）
 - 基礎づけ主義からの離脱：ロールズ、ローティなど

具体的に

- たとえば、今日、「歴史の必然」「歴史の発展段階」「歴史法則」などを信じている人は誰もいない
 - 50年前と大きな違い
 - 信じていれば、「その根拠や証拠を探求する」「理論をより精緻化する」といった探求課題が生まれ、しかもそれが多くの研究者に共有される。
- たとえば、今日、「資本主義か社会主義か」を論じる人はいない。（アメリカ的資本主義か、北欧型社会民主主義か、の議論はあるが）
 - **大きな共通の問いがない**。もしあれば、論争はより活発化し、多数の論者や読者が参入するだろう。

きわめて大胆に言って

- 近代の人文学は、
 - 中世以来の「解釈学」を聖書以外に向けるか、もしくは
 - **デカルトの夢**：「確実な根拠の上に、「知」を構築する」を探求するか
 - カント、フッサール
 - これは同時に、「近代自然科学」を根拠づけたり限界づけたりする作業
- 近代の社会科学は、**ホッブズの問い**から
 - 神に依拠することなしに、いかにして「社会」を構築するか

○かつては「歴史の意味」「真理とは」「正義とは」といった問いが大まじめで探求された。今、その勢いはない。

○現代リベラリズムとその周辺（ロールズ、ドゥオーキン、センなど）は、デカルトの伝統とホッブズの問いの結合

一時期大変な盛況 「知の発展」があるかに見えた・・・

大きな物語の消失が意味するもの

- 個々の研究を意義づける体系の消失
 - かつては、たとえば「貧困」に関する個々の実証研究はマルクス主義の文脈との関連でその意義を考えることができた。
 - あるいは、不平等度の測定は、マルクス主義対近代化論の文脈に載せることができた。
 - かつて日本政治の研究は、「民主化」の物語
- 今日、個々の研究を意義づけるような大きな知の体系は存在しない、あるいは知られていない。
- **Research Question**を立てる基盤が脆弱
- 個々の**Research Question**の学術上の意義が分かり難い、説明しにくい

問題状況と思われる現象

- 個々の学問分野を超えて人文学・社会科学の広範な分野を巻き込んだ学術研究プロジェクトが存在しない。（「学際的」はあるが、問いが小さい。）
- 一般的に、個別実証的（個別理論--数理モデル系）な研究は盛んだが、パラダイムの革新をもたらすようなもの（挑戦性）とはいえない。
 - 専門性への沈潜：理系にも言えるが。評価、キャリアの問題もある。
- 大型プロジェクトは、データの収集・アーカイブ化に焦点。これらは重要だが、やはり挑戦的（transformative）な面が弱い。
- 総じて言えることは、人文学・社会科学の多くの分野では、「いかなる研究の成果が、当該分野の学術的發展に大きく寄与するものであるか」についての共通理解、感受性、問題意識が弱い。

自然科学との違い（1）

1. 自然科学の多くの分野は、何らかの形で「**経験的な証拠**」を提示し、それによって「**知識の発展**」を確認することが、原理的に可能。
 - その前提に、「**客観的な自然的世界**」の想定がある。
 - たとえば、（失敗したが）もし実際に細胞へ何らかのストレスを与えることで、そこから万能細胞を作り出すことができれば、（万能細胞かどうかは、経験的にチェックできる）それはノーベル賞級の「発見」を意味する。
 - スーパーカミオカンデのような巨大な観測装置を作り、膨大なデータを収集して解析することで、場合によって、ニュートリノに質量があるはずだという結論を得ることができる。

自然科学との違い（2）

2. 自然科学の多くの分野は、何らかの形で「知の体系」が存在する。

– 物理学の場合、理論物理学の膨大な体系

- スーパーカミオカンデのような場合、研究における個々の観測装置および観測データの「研究上の意義」は、膨大な理論体系によって支えられている。（観測の理論負荷性）

– 生物学の場合、遺伝学や分子生物学を基盤とする体系

3. あるいは、工学や医学のように、「対象世界に働きかけて、世界を改善することができる」。

– 癌の治療薬ができれば、明白な「成果」

– 名人に勝つ将棋ソフトができれば、明白なAIの進展

自然科学との違い（3）

- これに対して、人文学・社会科学の多くは、
 - 「客観的な対象世界」を想定することができない。
 - 大きな「知の体系」が存在しない。
 - 対象世界に働きかけることができないか、できたとしても「何が世界の改善であるか」を明白に示すことが困難。

これらの困難の一つの背景

- 人文学・社会科学は基本的に「意味」の探求（客観的世界の探求ではなく）
 - 哲学、倫理学
 - 文学：たとえば源氏物語研究であれば、その作品をどう「読む」か。それは簡便には「解釈・鑑賞」と呼ばれるが、やはり「意味の探求」
 - 法学：「法的正義」や「適法手続き」のような価値を掲げて、自分たちを律する法の構築
 - 社会学：よりよい「共同性」の探求
 - 経済学：表面的には「客観的なものとしての市場」の研究。しかし、実際上は「財に対する人びとの価値づけ」の体系の研究。
 - 歴史学：基本的に、文書を中心とする史料の解読を通じて、当時の「政治構造と過程」「社会構造」「心性」などの解明
- 研究の手法としては、さまざまな物的あるいは意味的なデータの収集分析を用いており、その点では、自然科学と共通しているが、探求しようとしているのは「客観的世界」ではなく、「意味」あるいは「価値」。

「意味の探求の学」ということの意味

- その対象世界は基本的に「意味世界」だということ。
- 「意味世界」とは「意味から成り立っている世界」
- 人文的世界：価値、意味、意義、概念、命題、理論、解釈、思想、等々から成り立っている世界
- 社会的世界：まず世界の意味、価値、規範、ルール、制度などからなっている意味世界があり、それを準拠にしながら人びとの経験的行為が営まれている世界。
- 自然的世界のように、人びとの思念から独立した外部世界として存在しているのではない。
- この意味世界への探求はいかにあるべきか。
- 意味世界の探求は、意味を解釈することであると同時にそれは構築につながる。
- 「解釈」には、最終的には「外部」がない。自然科学との違い。¹⁷

意味の探求

- 知の真偽を、究極的に、データによって決着をつけることができない。
- ある知を受け入れるかどうかは、Reasonable, rational, valuable, justifiable, などの性質によって。
- 解釈の多元性、価値の多元性
 - 解釈は構築を伴う。構築とは、規範的な意味世界を組み立てること。
(外部がないのだから、経験的に「正しい解釈」を検証することはできない。)
- にもかかわらず、人間社会は、法制度の共有、政治的権威・権力に関する一定の合意、倫理観などの共有、歴史などの一定の共有感覚、仲間意識、などを基盤とする。
- また、人文学・社会科学の対象世界は、意味を基盤としながらも、さまざまな物的その他の経験的事象からなっている。(心理、感情、文書、発話、行為、制作物、建造物・・・) データの重要性
- 「社会」は意味を基盤に、経験的事象が配置・組織化されることで成立している。こうした「社会の構築」に、人文学・社会科学が参画することが期待されている。

たとえば、次の文

- 「公衆がそこで成立する「世界」とは、社会圏としての公共性を指す言葉である。・・・世界はその純粹な相では、理性的存在の問の意思疎通において作り上げられる」（『公共性の構造転換』訳147）
- 「公衆」「世界」「社会圏」「公共性」「理性的存在」「意思疎通」のいずれも、自然的事象ではない。
- この文において、ハーバマスはこれらの諸概念を作り上げつつ関連させ、全体としてある視点からなる社会的世界を構想しながら、そのあり方を論じているのである。
- これは、「自然的に存在する世界」を「客観的に記述」という性格のものではない。この文において、社会的世界は独自のしかたで区画され、その構成要素が構築されながら位置づけられている。

理論知の構築の試みが必要なのだが・・・ でも、客観性の経験的基盤がないとしたら、 何が可能か？

- 神々の闘争か？
- いや、「共有しうる理論知」の可能性
- 「共有しうる」とは
 - むろん、権力的に共有を「強いる」ことではない
 - 自然科学の場合と同じように、「証拠に基づく道理の通った議論」「学問的廉直性」「公開性」「論理性」「普遍性」「客観性」などの条件に従う。
 - 「知的公共空間における討議を通じて受け入れられうる」こと。
- それに求められるのは
 1. 共有されている経験的知識（データ）を「説明」する能力
 2. それに基づいて「共有しうる価値・理念」を語る能力
- 学問共同体における「公共的なもの」としての共同知。

かつては（かりに間違った理論知ではあったとしても）

- マルクスのように、人文学・社会科学の全分野にわたる総合知の展開
- ウェーバーのように、経験主義を標榜した膨大で緻密な分析からの「近代の意味」の探求
- ポパーのように、科学哲学と社会理論との総合知
- レヴィ=ストロースのように、人類学の専門的探求を基盤にした人文学・社会科学の根源的なパラダイム転換
- ハーバマスのように、近代のプロジェクト「市民社会」への絶えることなき探求
- ロールズのように、規範的探求の衰退状況のなかでの「正義論」（道徳哲学）の復興

など

また、人文学・社会科学分野における 知の進展の例

- 社会主義経済に対する市場経済の優位
- 不況期における財政出動の意義（ケインズ）（もっとも、今日の経済学ではまだ論争）
- 歴史主義、社会変動法則からの解放
- 近代社会理論における自民族（西欧）中心主義への批判と反省
- 知の権力性の発見
- 多様な差別の発見とそれへの社会的応答
- ポパーの科学哲学

- 他方、新たな課題
 - 経済的發展が必ずしも民主化をもたらさない
 - グローバリゼーションの中で、社会的分断が深まる
 - 20世紀後半以降の急速な少子化と高齢化

現代社会の課題と理論知への探求

- 大きな物語は消失した。しかし、意味の探求の学としての
人文学・社会科学にとって、**理論知への探求**は不可欠。
- 理論知の探求と、現代社会の課題に応えようとする
こと（社会への応答性）とは距離のあることのように見える
かもしれない。
- しかし、
- たとえば超高齢化・人口減少社会
 - 持続可能な社会の「基本構想」を提示しあい、議論し合うこと
 - 単に、介護の技術や地域社会の相互扶助システムの構築などではなく（むしろ、これらも重要）
 - あるいは「尊厳死」の問題
- あるいは多文化共生、文化的多様性
 - 異なる文化的背景を有する人びとと同じ社会を生きることの意味
 - 単に、「社会保障負担」とか「治安」とかの矮小化を超えて

現代社会が直面している課題は、

- Society 5.0が想定しているような「ICTに支えられた快適社会」という（楽観的）側面だけではない。
 - まして、日本経済に貢献する学術をどう育てるか、だけではない
- 超高齢化、少子化がもたらすさまざまな困難
 - 社会保障制度、長い老後、空き家、墓
 - これらの「解決」には、技術ではなく、「制度の再構築」が不可欠
- グローバリゼーションに伴う諸問題
 - ラスト・ベルト、排外主義
- ICTがもたらす諸問題
 - SNSを通じての政治意識の分断、断絶など多数

人文学・社会科学が発展するとは

- それぞれの学問分野における**根源的な問い**を探求しつつ
 - たとえば政治哲学であれば「正義とは何か」、倫理学であれば「規範の基礎」、社会学であれば「共同性とは」・・・
- 具体的な**社会的課題への取り組み**において、そうした**根源的問いへの探求を深化させ、理論知を発展させる試み**を展開する。
 - たとえば、「社会の分断」問題に取り組むことは、「言論の自由」「個人の尊厳」等々の根源的問いに取り組むこと。
 - 「持続可能な社会保障制度」に取り組むことは、「平等」「公正」「共同性」等々の根源的問いに取り組むこと。
 - 単に、社会的課題を中心にした個別の小さな研究テーマを多数展開するのではなく

根源的な問い、理論知、具体的な課題との 関係

- 根源的な問い：人文学・社会科学における古典的問いを基盤に。問いの共有、フレームワーク
- 理論知：そうした問いへの答えにチャレンジする理論的な体系
- より具体的な課題への取り組み：実践性を通じての intelligibility、「成果」の可視性、学術的評価の共有性
- あらかじめ理論ないし答えがあって、それを用いて応用問題を解く、という方法は不可能。
そうではなく、応用問題を解こうとする過程のなかで理論知を作り上げていく試みを展開する。
- 挑戦性の重要性
- 国際的学術コミュニティに対する発信

現在の学術システムの問題

- 今日の学問状況から言って、直接的に「意味の探求」に取り組むことはもとより、今述べた根源的な問い・理論知と課題への取り組みの連係も困難
 - 専門性：各専門分野での通常の研究の枠をはみ出している。（図書としては発信できるが、専門雑誌への投稿論文としては困難。学術コミュニティ（専門レベルでもより広範でも）における反応は極めて弱い。
 - とくに若手研究者にとっては、あまりにもリスクー
 - 国際性：国際的発信はますます障壁が高い
- 研究者からの「自発的ボトムアップ」な研究プロポーザルは出にくい。出ても、審査に通るかどうか？

例えば次のような研究プロジェクト

- 先進社会における社会的分断の構造の解明
 - 日本だけでなく、アメリカ、ヨーロッパを対象
 - SNSの分析、インタビュー、多様な意識調査
 - 政治過程分析、社会運動研究、コミュニティ研究
- 国際的移動と多文化共生に関する研究
 - ヨーロッパにおける「移民」の状況の実態と制度に関する研究
 - カナダ、オーストラリアなど多文化主義社会の実態研究
 - 日本における外国人労働者、その生活実態と地域社会での取り組みに関する研究
- ほかに、多数考えられる
- 中核メンバー数名から10数名。ほかに協力者（院生含む）100人から2,3百人
- 期間は5年以上
- だいたい特別推進研究レベルないしそれ以上のビッグプロジェクト
- いずれも、できれば国際共同研究として。少なくとも海外の研究者を含む。

課題

- 誰がどのようにオーガナイズするか？
 - 純粹ボトムアップ的には手が挙がりにくい課題
 - 組織化の困難
- 予算
- 募集、審査等の体制
- ボトムアップという建前との調整

- その他、仕組みづくりは容易ではないが・・・

人文学・社会科学における学術の振興とは

- 大きな物語は消えたけれど
- ICTの進展とグローバル化の中で
 - 世界はさまざまな問題を共有している。
 - 生き方と文化的な多様性を維持しながらグローバルに統合された世界を構築していくことはいかにして可能か？
 - 環境問題を中心とする持続可能性問題はもとより、経済の持続的な成長、貧困の解消、基本的平等性の確保
 - 分断の抑制、市民的共同性の涵養
- 大きな物語は消滅した。しかし、人間社会は本来的に「未来」に意味を見いだす必要がある。
 - 人文学・社会科学は、「どのような未来」を切り拓いてくれるか。
- そうした問題意識のもとで、根源的な問いに根ざしつつ、大きな課題に取り組むことを通じて、理論知を切り拓いていくことが期待される。